

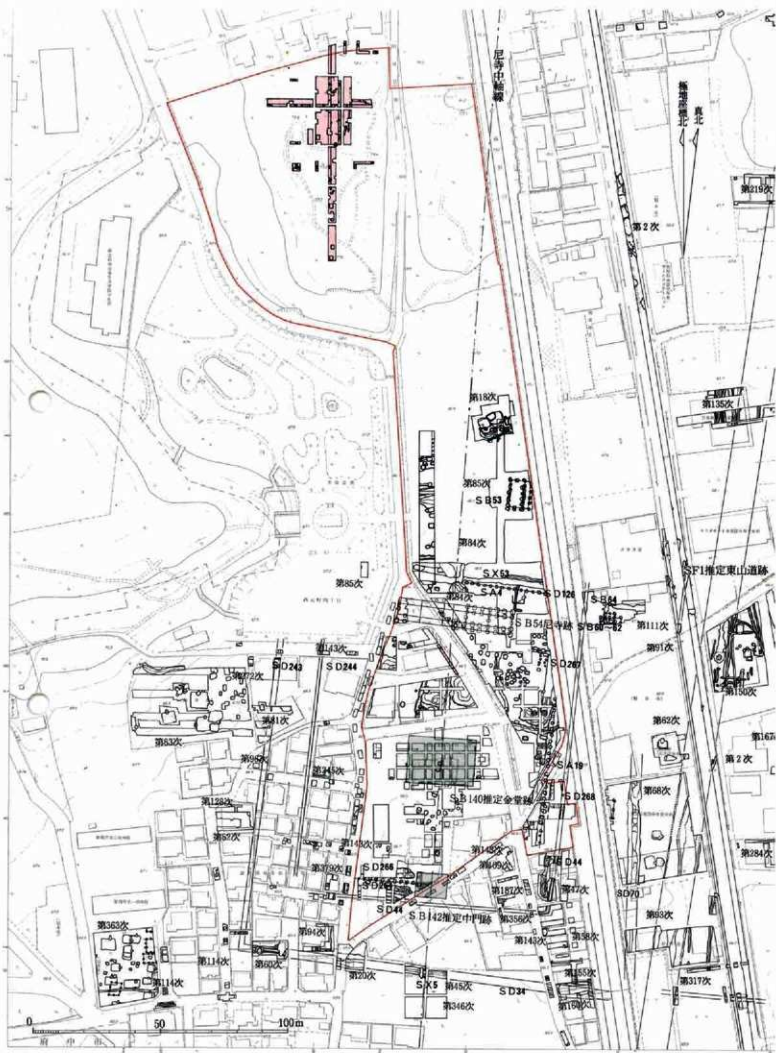
国分寺市文化財調査報告 第44集

武蔵国分尼寺跡Ⅳ

平成7年度発掘調査概報

1997




国分寺市教育委員会



第1図 武藏園分尼寺跡全体図（朱線は史跡指定地。朱網は7年度調査区）

例 言

1. 本書は東京都国分寺市西元町に所在する史跡武蔵国分寺跡（尼寺地区）の史跡環境整備事業に伴う平成7年度発掘調査の概要報告である。発掘調査は文化庁と東京都の補助を受け、国分寺市教育委員会が調査主体となり、国分寺市遺跡調査会が調査を担当した。
2. 調査は、武蔵国分寺跡第413次調査として、平成7年6月15日から平成8年3月31日まで（現場における作業は平成7年6月15日から平成7年12月19日まで）、買収地内において、面積593.43㎡の範囲について実施した。出土遺物・写真・図面等へは遺跡略称のMKを冠し、「MKⅢ・Ⅳ-413-以下 台帳番号、登録番号」のように注記しており、全て国分寺市教育委員会で保管している。なお、出土遺物は瓦類を主としてコンテナ111箱である。
3. 調査に至る経過と調査計画、位置・立地と周辺の遺跡、調査のあゆみと現状、順序、調査方法については、『武蔵国分寺跡Ⅰ（平成4年度発掘調査概報）』を参照されたい。
4. 図面中の方位は特記以外は借寺中軸線を基準とした極地座標北を表示している（詳しくはⅢ-1参照）
5. 遺構断面図の水糸高（上段）は特記以外は全て海拔標高78.00mに統一した。
6. 遺構断面図における地山のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

 III b層	 III c層（ローム漸移層）	 IV・V層（ローム層）
--	--	---
7. 遺構記号は下記のとおりとし、Pを除いて第1次調査より連続番号を与えている。

SA 竊跡・柱列跡	SB 礎石建物跡・独立柱建物跡	SD 溝跡	SF 遺跡跡
SK 土坑	SI 住居跡・工房跡	SX 特殊遺構	P 小穴・小柱穴

なお、平成7年度より横穴墓・火葬墓・土坑墓・地下式横穴（墓）などの記号をSZとしているが、本報告では旧記号のままとした。地下式横穴については当初検出時のSXもしくはSKで登録してある。
8. 遺物記号は次のとおりとし、調査回数毎に連続番号を与えている。本書においては実測図と写真図版の下段に表示した。なお、遺物には黄色ガスターカラーで注記してある。

PH 土師器	PL 土師質土器	PK 須恵器	PN 灰釉陶器	KA 鍔瓦	KB 宇瓦
KC 男瓦	KD 女瓦	KH 埴	MA 銭貨	PT 中近世陶器	RI 板碑
RJ 板碑台石					
9. 発掘調査から概報作成にいたるまで、文化庁・東京都教育委員会をはじめとする諸機関、諸先生方にご指導、ご助言を賜り、また地元住民をはじめ関係各位のご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

荒井健治・板野晋雄・江口桂・太田和子・穴野佐紀子・塚原二郎・西野善勝・早川 泉・深澤晴幸・松田隆夫・持田友宏・山下守昭・和田信行
黒鐘自治会、府中市立武蔵台小学校、国分寺市立第4小学校、国分寺市史編さん室
10. 平成7年度の調査体制は次のとおりである。

調査主体 東京都国分寺市教育委員会

調査担当 国分寺市遺跡調査会

役員および監事	会 長 藤間 恭助	国分寺市文化財保護審議会委員長
	副会長 吉田 格	調査団長
理 事	永峰 光一	国学院大学教授
	坂清 秀一	東京都文化財保護審議会委員
	大川 清	国士館大学教授
	本多 良雄	国分寺市長

	内野 孝治	国分寺市教育委員会教育委員長	
	野村 武郎	国分寺市教育委員会教育長	
	星野 亮雅	国分寺市社会教育委員の会議議長	
	本多寅太郎	国分寺市文化財保護審議会委員	
	古関 豊	〃	
	柴崎 正次	東京都教育庁生涯学習部文化課副参事	
	山崎 宏	国分寺市教育委員会社会教育部長	
監 事	榎戸 潔	国分寺市社会教育委員会議副議長	
	佐藤 攻	東京都教育庁生涯学習部文化課課長補佐兼理蔵文化財調整係長	(平成7年6月1日退任)
	可見 通宏	〃	(平成7年6月1日就任)

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

	委員長	吉田 格	(考古)
	委 員	永峯 光一	〃
		〃 坂詰 秀一	〃
		〃 大川 清	〃
		〃 宮本 敦	(古代史)
		〃 金丸 義一	(建築史)
事務局	事務局長	岡村 豊	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
	事務局員	宇都宮祐一	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
		藤倉しのぶ	〃 庶務係員
		内藤 達也	〃 〃
		松澤 修	
調査団	団 長	吉田 格	国分寺市文化財保護審議会委員
	主任調査員	有吉 重蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
	調査員	福田 信夫	〃 文化財保護係員
		上村 昌男	〃 〃
		上敷 頌 久	〃 〃
		滝島 和子	〃 囃子遺跡調査員
		岩崎 玲子	〃 〃
		木下さおり	
	調査補助	井口正利・小池和彦・荒 順・鈴木靖彦・桂 弘美・飯島敏雄・島田智博・ 中田一夫・斉藤光司・多田多文治・豊泉好一 川岸満子・東條一三・大下ゆみ・相馬しのぶ・若林雅子・桑名俊子・鈴木雪 江・大羽正子・鈴木フミエ・川越裕子・小川輝子・小林幸江	

11. 本書は吉田格団長の監修のもとに、福田信夫が執筆、編集した。

目 次

例 言

I 調査の経過	1
1 既往の調査	1
2 調査方法	3
3 調査日誌抄	4
II 調査の概要	9
III 出土遺物	13
1 土器類	13
2 瓦埴類	14
3 板碑・銭貨	15
IV まとめ	15

挿 図 目 次

第1図 武蔵国分尼寺跡全体図	
第2図 西院址礎石配置図『東京府史蹟勝地調査報告書』（報告書を再トレース）	1
第3図 北方地区全体図（1：600）	5
第4図 7年度調査区遺構配置図（1：250）	7
第5図 SI522 住厨跡断面図	9
第6図 SI525 住厨跡・SX143 昇降口断面図	10
第7図 SX141 土壘南辺・SD312 溝跡断面図（AD～AH138区）	11
第8図 SD313 溝跡断面図	11
第9図 SK1556 土坑断面図	12
第10図 出土土器実測図（1：3）	18
第11図 出土土器・甕瓦・宇瓦実測図（1～5は1：3，6～10は1：4）	19
第12図 出土板碑(1) 実測図（1：6）	20
第13図 出土板碑(2) 実測図（1：4）	21
第14図 出土板碑(3)・銭貨実測図（1：6，銭貨拓は実大）	22

写真目次

- 写真1 調査前状況(南から)
- 写真2 レーダー探査測定状況
- 写真3 遺跡見学会
- 写真4 現地指導
- 写真5 講堂地区トレンチ調査状況

図版目次

- 図版1 1 SX141 土塁内北半部全景(西から)
2 SX141 土塁内南半部全景(北西から)
- 図版2 1 AK~AL136区礎石(S-1), SI528J 石囲炉(南から)
2 AO~AQ137, 138区礎石(S-8~14)(西から)
3 SD313 溝(北から)
- 図版3 1 SX141 土塁南辺, SD312 溝土層断面(東から)
2 SX141 土塁西辺(西から)
3 SI526 住居全景(西から)
- 図版4 1 AN141区板碑出土状況(東から)
2 SK1556 土坑板碑台石出土状況(北東から)
3 SX141 土塁南方南北トレンチ(南から)
- 図版5 出土土器(1:2, PH01とPK13は1:3), 甕瓦・字瓦(1:4)
- 図版6 出土文字資料集成(1)(1:1)
- 図版7 出土文字資料集成(2)(1:1)
- 図版8 出土板碑・銭貨(1:4, 板碑R101, 02, 台石RJ01は1:9, 銭貨は実大)

I 調査の経過

1 既往の調査

平成4年度から6年度までの調査成果については既刊の『武蔵国分尼寺跡Ⅰ～Ⅲ』を参照されたい。次に、今年度調査の柱とした北方地区に係わる既往の調査についてまとめる。

『新編武蔵風土記稿』（文政11年（1828）成立）巻之九十二、多摩郡之四、府中領の中、「国分寺村」の項に、黒鉄 村の西にあり、府中六所にある所の鉄像の弥陀は、昔此谷より掘出せしものなりといふ、この所の丘林を祥応寺跡と呼、この地も旧跡とみへて古瓦を多く掘出して散乱す、国分寺の瓦と一緒のものなり、天平の古へ、国府に僧寺尼寺の両院を置かれしとみたれども、今その尼寺の旧迹を失ふ、古瓦をもって按ずれば、彼尼寺の旧跡ならんも知るべからず、されど外に放古の便もなければ、今知るべからず、とあって、尼寺北方の台地上の古瓦を多く散布するこの地が祥応寺跡と呼ばれていたことを示した。

『東京府史蹟勝地調査報告書 第一冊「武蔵国分寺址の調査」』（福村坦元・後藤守一1923、東京府発行）では、現地踏査により、5個の礎石や4個の抜き取り穴と、切り通しに面して左右と奥を囲む「土壇跡（土塁と推定）」を確認し、礎石は「何等対角的位置を保たず」という状況であったが、間口18m、奥行き9mほどの南北棟礎石建物跡を想定した。尼寺跡比定問題では国分寺関係の建物のある地として「西院跡」と仮称するにとどめられた。なお、1326（正中3）年銘の阿弥陀三尊来迎画像板碑や1374（応安7）年銘の天蓋・華瓶付阿弥陀三尊種子板碑はこの時発見された数十点の板碑の中の2点である。

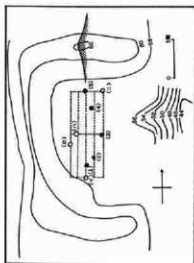
その後、石村喜英は『武蔵国分寺の研究』（1960）で、この地に尼寺伽藍を想定し、その早期衰微後に祥応寺という私寺が創建されたとし、その時期は最古の有紀年銘板碑の示す乾元2年（1303）以前とした。

昭和39年の調査で、本地区の南方一帯（通称「鐘撞堂」の地で、石村が尼寺鐘撞跡を想定した地区）に推定金堂と尼坊の基壇が南北に配置されて発見されたことにより、尼寺伽藍と確定し、長年の尼寺比定論争に終止符が打たれた。

ついで、昭和44年の下河原線拡張（東京外環状線計画、現武蔵野線）に伴う東側塚の調査の折りに、幅1mほどの試掘トレンチが3本入れられた。調査の結果は滝口宏・宇野信二郎1974『武蔵国分尼寺』に詳しいが、要するに、

- ① 土塁状の土壇跡は堅固なものではなく、瓦や土器片を少量含む土を積み上げたものであること。
- ② 礎石といわれるものは3個しか確認できず、配置についての的確な基準が得られないこと。
- ③ 多量の遺瓦（塔再建期）の存在から瓦葺礎石建物が9世紀代に創建され、その滅失後に三方を土塁に囲まれた原瓦を載せない中世の礎石建物が想定されること。
- ④ その存続年代は、建長5年（1253）銘の鉄造阿弥陀如来坐像の出土伝承と出土板碑の紀年銘から1253～1493と考えられること。
- ⑤ 鎌倉街道の切り通しを挟んで対岸の東側の塚は封土内出土の銭貨（洗武通宝）から15世紀初頭に近い頃の築造と考えられ、この中世建物との関連でとらえられること。などであった。

そして、近年国分寺市史編纂で明らかになった「国分寺村祥応寺開発場引寺仕度願書」（1726享保11）（本



第2図 西院址礎石配置図
『東京府史蹟勝地調査報告書』
（報告書を再トレース）

乍恐口上書を以奉願上候

一武州多摩郡国分寺村ニ從古米禪宗の小寺、深川海福寺末禪寺と申宣寺、無
檀中ニて及大破ニ拙者地内ニ草庵体ニて差置候所、幸此度願場の内地而少々
割渡シ開発仕候、依之右禪寺開墾場へ引移取立相続仕度奉願上候、勿論然
上ハ只今迄の国分寺村禪寺、寺号寺地の儀ハ遺候様ニ可仕候、御慈悲を以
願の通引寺仕、寺用相勤候様ニ被仰付被下候ハ、難有可奉存候、以上

武州多摩郡国分寺村願人

享保十一年年六月

名主儀右衛門 ㊦

同新田村与頭仲右衛門 ㊦

同村 秦 洲 ㊦

岩手藤左衛門様御役所

という内容で、国分寺村の名主本多儀右衛門が本多新田の開墾にあたり、以前より江戸の深川海福寺の末寺で、禪宗の貧しい小寺があり、檀家もなく草庵のように続いているだけであった（通印者に秦洲という僧侶があり無住ではなかった）「禪寺」を新田村落の寺用をつとめさせるべく引寺を代官役所に願出たものであり、この願いはまもなく許可され、この年の十一月には、八幡宮と禪寺の境内地在現地（国分寺市本多四丁目）に決り、出百姓を檀方に取り立てて八幡宮を鎮守に、禪寺を菩提寺とすることとして本寺へ届出ている（北原進1990「第三章 村と本百姓」『国分寺市史中巻』）。

このことと、現在も本多に残る伝承により、少なくとも享保11年（1726）以前に尼寺北方のこの地に「禪寺」の寺名を有する江戸深川海福寺の末寺の禪宗小寺院が存在し、これが口碑に伝わって『新編武蔵風土記稿』の記述につながったことが判明した。しかるに遺跡との関連については出土板碑（最新は明徳2年（1493））をみても年代的な隔りがあり不明である。また、多量の国分寺瓦の散布から想定されている9世紀代の礎石建物について、寺域確認調査の結果により寺域外に位置することが明らかとなったので、この存在にも疑問がなげかけられていたのである（有吉重蔵1986「第五章 中世における国分寺市域 第五節 国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史上巻』）。

最近では、北側に隣接する郡宮川越道住宅（府中市武蔵台3丁目）の改築に伴う全面調査（平成2～6年度、面積17194.97㎡）で、先土器から中世に及ぶ遺構・遺物が検出されている。奈良・平安時代の住居が81軒、掘立柱建物跡が43棟と纏まっている。国分寺創建期の遺構群は西側谷から斜面にかかる一帯に占地し、造営に係わるものとみられている。また、9～10世紀代の遺構群は台地中央部に展開し、国分寺市域へと延びる状況を示している。

2 調査方法

調査基準線は従来どおり、僧寺伽藍中軸線に合わせた極地座標系によっており、尼寺区域はその第三象限にあたる。極地座標原点は国家座標のIX系 $X = -34,446.024$ 、 $Y = -32,449.078$ で、極地座標北方向角は $353^{\circ} 05' 32''$ を示す（数値は平成7年7月19日に再測し、若干訂正した）。発掘区の呼称など詳しくは、『武蔵国分尼寺跡I』を参照されたい。

調査の目的と調査区の設定

7年度調査は北方地区台地上の中世寺院跡を構成する礎石建物跡と土塁状遺構の構造や規模を確認することを主目的とし、尼寺中核部の講堂想定地区での確認作業を追加で実施した。

①北方地区 調査区の設定にあたり、下草と小木を除去した上で、土塁状遺構を含む台地上平坦部の地形図（25cm間曲線）を外注して作成した。地形図の基図は縮尺1/500の現況平面図（写真測量）とし、概ね標高76m以上について新たにトータルステーションを用いた平板測量で描画した。0.25m等高線とし（標高74～76m間は基図をもとに按分）、土塁状遺構のみ0.2m等高線で表した。測量の結果、土塁の方向が概ね極地座標系に合っているため、従来どおりこれを調査基準線とした。

下草を取り除いたところ、礎石3個（S-3,10,11）を発見したので、土塁内を0.5mメッシュでボーリングし、さらに4～6個の位置を確認した。あわせて地下レーダー探査を土塁内では1.5～3mメッシュで行い、合計11個ほどを認識した。いずれも、土塁内のやや北側に集中している。従って、土塁とこれらを縦断する南北及び東西のトレンチを十文字に設定した。すなわち、第Ⅲ象限 AA～AH138区、第Ⅳ象限 AA～BB138区、AN133～145区とした。

なお、地下レーダー探査によって発掘前において次の知見を先取することができ、調査計画調整に有効であった。

- ボーリングによっても追認できる石の反応以外に、150箇所での石の可能性である反応があった。据付け痕跡や下層遺構等と推測されたが、調査の結果は根固めを含め据付け痕跡は無く、整地土中の瓦や石に対する反応と判明した。
- 土塁では強い反応は無いので昭和44年の所見どおり堅固なものでないが、頂部に溝状のくぼみもしくは硬質面が縦走している反応があり、調査の結果は版築状の盛土の反応であることが判明した。
- 土塁南辺内側に沿って、周囲とは異なる地盤が連続している反応があり、調査の結果は建物と土塁の間で、浅く幅広い溝状となっていることが判明した。
- AC136区付近に深さ約1.5mの位置に空洞に類似した反応があり、調査していないが、地下式横穴の可能性がある。
- 土塁南方では地盤の乱れや浅いくぼみの反応が数箇所あるのみで、遺構の分布は稀薄と推測され、調査の結果もこれを裏付けた。

②講堂想定地区 講堂が想定される位置には昨年度まで民家があり、調査を避けていたが、昨年度末に買収されたので、部分的にでも確認できたらとトレンチを入れた。平成5年度調査区から平成6年度調査区にかかる長さ13.7m、幅1mの調査区を東側の道路に沿って設定した。

現況と層序

今年度新たに調査を行う北方地区は、武蔵野段丘上の国分寺崖線縁辺部に立地する。西側には崖線に沿う野川の支谷（黒鐘谷）が大きく深く入り込んでおり、調査地点の西と南は谷底低地にむかって傾斜面となっている。

台地上のI層（表土）はあまり形成されず、SX141土塁周辺では20～30cm、南方では30～40cmである。II層（黒褐色土）は残らず、SX141土塁の下部にのみ約20cm厚のIII層（縄文時代遺物包含層）上部（Ⅲa層）が残り、土塁内及び周辺では約30cm厚のIII層中部（Ⅲb層）の下部から下が残る。

3 調査日誌抄



写真1 調査前状況(南から)

- 6月上旬 下草除去などの諸準備に入る。
- 6月13日 地元黒糠自治会(会長森井一夫氏)に協力依頼。調査区周辺に広報板設置。周辺道路を通学路とする国分寺市立第4小と府中市立武蔵台小を訪問し各校長に協力依頼。
- 6月15日 国分寺市と国分寺市遺跡調査会において調査委託契約締結、本日より調査開始。基準点測量と地形測量開始。
- 6月19日 方眼杭設置と土塁輪郭の測量終了。ボーリングによる礎石等探査を開始する。
- 6月22日 小雨の中、地中レーダー探査測定を行なうも、思わしい結果は得られず。



写真2 レーダー探査測定状況

- 6月30日 土塁周辺のレベリングとボーリングを終了し、トレンチを設定する。浅いために現われた礎石は4個で、別に2個は確実に捉えられた。
- 7月3日 トレンチ交差部分より発掘開始。
- 7月11日 AN141区で板碑出土。
- 7月24日 気温36度、夏本番。以後蚊に悩まされる。
- 8月3日 土塁築成土及び土塁内は整地土の上面までの表土除却をほぼ終了し、土塁内の礎石分布範囲の拡張に入る。
- 8月15～16日 調査会夏休み。
- 8月22日 AK136区で最も大きな礎石(S-1)と石囲炉(SI528J)を旧トレンチ調査埋め戻し土を除

去して発見。

- 9月4日 土塁内確認状況全景写真撮影。以後トレンチに沿って幅1mで土塁築成土及び土塁内整地土を掘り下げ、地山面を出す。
- 9月7日 AM.AN137～139区の整地土下にて竪穴住居を検出。
- 10月2日 史跡整備計画策定委員会現地視察。
- 10月5日 土塁の各辺、コーナー部の確認開始。
- 10月10日 遺跡見学会、310名参加。



写真3 遺跡見学会

- 10月12日 気球による空中写真撮影(委託)実施。
- 10月13日 調査研究指導委員会。



写真4 現地指導

- 11月22日 本日より遺構内への砂りめ戻し開始。
- 12月4日 原状復旧を終え、北方地区発掘調査完了。
- 12月5日 講堂地区トレンチ設定。



写真5 講堂地区トレンチ調査状況

- 12月19日 講堂地区トレンチの埋め戻し終え、4ヶ年に及ぶ尼寺地区確認調査を完了する。

II 調査の概要

平成7年度の調査は総面積593.43㎡を実施した。内訳は北方地区581.06㎡と追加でトレンチ1本を入れた講堂地区12.37㎡である。

確認された遺構は、北方地区では、下層より、縄文時代の竪穴住居1軒（石囲炉）、埋壘2箇所、平安時代の竪穴住居6軒、中世の礎石建物1棟（礎石15個）、土塁と溝による区画施設1条、溝2条、入口部施設1箇所、土坑11基、小穴55個（土坑と小穴のいくつかは平安時代に属する可能性がある）、講堂地区では、不明落ち込み2箇所（内1箇所は平成6年度検出遺構の一部）と小穴5個である。以下、順に説明する。

北方地区縄文時代の遺構

中世の遺構により縄文時代遺物包含層が大きく削平されている状態で、幅1mで深掘りした範囲を中心に、土器、石器とともに遺構の検出をみた。

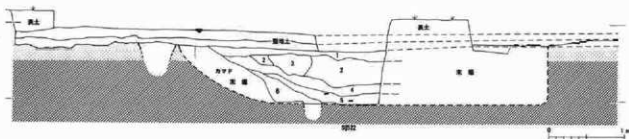
S1528J住居は石囲炉によって確認されるが、規模は不明である。石囲炉は東西0.8m、南北0.6mで遺存状態は良い。昭和44年の調査（南トレ）でS-1礎石とともに確認されている。

SU-1埋壘は単独で確認されたが、位置的に昭和44年の南トレ拡張区検出の敷石住居（写真より推測）付属の埋壘と同一と思われる。但し、今回の確認面は低く、既に敷石の石は無く、埋壘の口縁も1点のみで大きく欠損していた。埋壘所用の深鉢は加前川B式の後半に比定される。

北方地区平安時代の遺構

土塁内の整地土下層より2軒、土塁築成土下層より1軒、土塁外で3軒の竪穴住居が検出された。

S1522住居は整地土を除去したトレンチで確認された。SB156礎石建物推定範囲の中央部にあたる。東西5.1m、南北推定4.6mの長方形で、北壁中央にカマドがある。現存Ⅲb層から0.7mと深く、遺物多数が覆土全体より出土した。カマド、床面は確認までにとどめた。

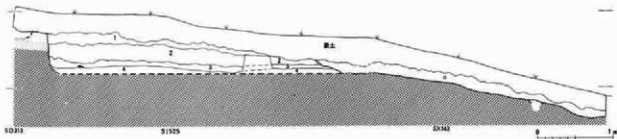


第5図 S1522住居断面図

S1523住居も整地土を除去したトレンチで確認され、南壁の一部と床面をあらわした。東西4m以上、南北2.7m以上の方形で、東壁にカマドを有することが確認された。床面までの深さは0.55mを測る。

S1524住居はSX141土塁に西辺断割りトレンチで内側土塁築成土にかかって確認された。東西2.9m、南北1m以上と小規模で、深さも0.3mと浅い。覆土に焼土粒を含むものの、床面は堅くなく、壁下の周溝も不明瞭であることから、住居跡でない可能性もある。

S1525住居はSD313南北溝の東側で確認された。東西5.1m以上、5.4m以内、南北1m以上。周溝は無い。床面までの深さ0.4m。遺物は東半分が多い。東壁をSX143昇降口により削平されている。



第6図 S1525住居、SX143界隈口断面図

S1526住居は傾斜角 10° とゆるい土塁西側谷壁斜面の中位で確認された。東西1.9m以上、南北0.5m以上の方形住居の北東部を検出した。幅0.2m、深さ0.05mの周溝を有する。住居の上部は0.1~0.2mほど厚の土塁崩壊土で覆われる。

S1527住居は土塁南西隅においてSD312外周溝に切られて確認された。東西2.5m以上、南北0.9m以上。

北方地区中世の遺構

SB156礎石建物と東側旧鎌倉街道切り通し面を除いて三方を囲むSX141土塁とを中心とする。

この付近のI層(表土)の厚さは概か20cm前後で、その直下の整地土も耕作や木の根等の影響を大きく受けており、礎石の据付け痕跡や抜き取り痕跡を確認することができなかった。

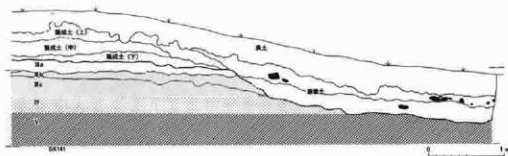
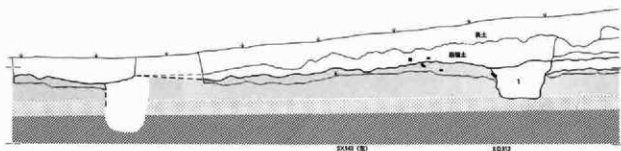
東京府報告にある4箇所の礎石抜き取り穴も確認できなかった。さらに、東京府報告は村内古老の話として、明治36年の八幡神社(現国分寺の西側で西元町1丁目)に所在、この地より東方約400m)社殿再建の際にここから多数の礎石を運搬し転用したとしており、現に社殿の礎石を観察すると、同規模、同石材の石を用いることから確かな事実として認めうるが、これらを抜き取った痕跡も確認できなかった。

整地土中に15箇の礎石に所用されたと推測される石がほぼ頂部レベルを指えて(標高77.891~78.048m)存すること、それらの一部が規則的配置を示すこと、整地土と礎石所用石の分布範囲の三方を土塁が囲繞することなどから想定される建物をSB156礎石建物と呼称する。石は全てチャートで、僧寺金堂や講堂に現存する礎石や尼寺金堂地区で出土した石と同じであり、これらを利用したものも推測される。

規則的配置の第1は、S-3、S-7、S-8の3個が南北に並び、直交してS-9が位置して、S-3とS-7間が6.8m、S-7とS-8間がその1/2に近い3.7m、S-8とS-9間が3m、方向はSX141土塁に合致する。第2はS-10とS-11の2個で、距離は2.2mと近いものの、最も大きな部類の石が安定した状態にあって、方向が第1の配列と合っていることである。15箇の礎石が全て原位置にあるものか、また時期、建物を異にするものか否かの確証は無いが、整地土の状況やSD313、314溝のあり方、板碑の出土状況などからAL~AQ136~139区の東西約9m、南北18mの範囲をSB156礎石建物の広がりを示すものと捉えられ、東京府報告の想定規模にはほぼ合う。

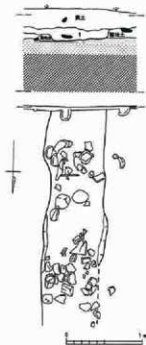
なお、東京府報告の5箇の石を確実に特定することは困難であるが、近似値から(1)(第2図、以下同じ)がS-5、(2)がS-3、(4)がS-7、(5)がS-10と各々推測することが可能である。

整地土(黒褐色土)は20cm前後の厚さで、下部層が人為築成土で、上部層は堆積土を混入するか、攪乱を受けているものと思われる。整地土中からは、平安時代の男瓦、女瓦片、土器類が多く、中世陶器片が若干出土しており、AQ138区やAL138Kでは瓦を敷き込んだ状態が確認された。



第7図 SX141土塁南辺、SD312溝断面図 (AD~AH138区)

SX141土塁はSD312溝を外周に廻らして「□」形を呈しており、規模は溝心を基準として、東西約30m、南北50mである。周囲の地山層(Ⅲa~Ⅲb層)を削り、地山層(Ⅲa層)の上へ3層(残存)をほぼ水平に積む。下部層は地山土(Ⅲa層)を基本として、整地土に似ており、中部層は地山層(Ⅲb層)のブロックをやや多く含む。南辺では上部~中部層にかけて硬度が増す。残存築成土の高さは0.5~0.6m、掘周りのSD312溝底面から0.9~1.15mで、0.2~0.4m厚の崩壊土が内外を含め10m前後に及んでいることから、当初の築成土は現存の程度度は少なくともあったものと推測される。



第8図 SD313溝断面図

土塁基底部の幅は3.2~3.3mで、外周の築成土立上り角度は、南辺で80度、西辺で70度である。

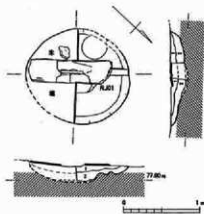
SD312溝は、SX141土塁北辺東端中央よりの始まり部分から、北辺、西辺、南西隅、南辺を各々確認した。溝の幅は0.7~0.8m、深さは外側確認面から0.4~0.5mを測る。底面幅は狭い部分と広い部分があって断面形は一定しない。

SD313、314溝は想定建物の方向に合う東側の南北溝で、北半部が幅広のSD313、南半部が幅狭のSD314で、西壁を揃えており、繋がるものと思われる。瓦片などが落ち込んだ状態で出土した。SD313の幅0.8m、深さ0.1m、SD314の幅0.3m、深さ0.2mで、合わせての長さが17.2mで、建物の想定南北規模に近い。

SX143昇降口としたのは、切り通しから入るために緩い勾配の昇降路を作出したと推測される遺構で、地山のIV層(ソフトローム)、V層(ハードローム)まで削り出している。0.1mほど載っていた整地土に似る黒褐色土は築成土というより、再堆積した層と観察された。傾斜は調査範囲で10度~20度である。現況でも、台地上で幅10m、奥行き10mほどが凹地となっていて、遠跡見学用の階段を設けている。想定建物の北半部に位置する。

SK1556土坑は土壘南辺と想定建物の中間にある径1.2mの円形土坑で、舟底状の底面中央部が径0.3mほど焼けている。覆土には焼土粒の他、炭化物も含まれる。坑底より0.2m上の土坑中央に板碑台石1点がほぼ水平に出土した。この付近の地山はIV層（ソフトローム）まで削られ、その上に暗褐色土が堆積しており、その上面より掘り込まれている。その面より台石まで0.1m下がる。台石の上下で覆土に差は無い。

SK1552、1553土坑は整地土下層で検出され、深さが1.2m（SK1552）、0.8m（SK1553）もあって、壁が大きくオーバーハングする形態や堆積土が似ており、溝状の同一遺構である可能性を指摘できる。



第9図 SK1556土坑断面図

土壘内南西部の状況

土壘内の南西部は土壘に沿って北→南、西→東へと下り傾斜となっており、旧鎌倉街道切り通し法面の窪みと合っている。排水の機能をもたせたものと推測される。この低地に、土壘築成土崩壊土や整地土崩壊土が0.1～0.2m再堆積し、その中や整地土上部付近に人骨細片、礎、板碑がまばらに散布して出土した。相当原位置より移動しているものと看取された。以前に板碑を出土した地点とも合う。

土壘南方の状況

表土層により平安～中世の遺構確認前は削平され、縄文時代遺物包含層の下部が表土下で確認される。土壘南辺に近く、SK1547～1550土坑、20mほど離れてSK1551土坑とビット群が発見検出されたに過ぎない。

これらの時期は特定が困難であるが、堆積土からみて中世の可能性がやや高いといえる。

講堂地区の状況

トレンチ南半部では平成6年度確認のSX119A不明落ち込みの北端部を検出し、ややおいてその北に南北7.5mのSX142不明落ち込みを検出した。中央が掘り鉢状に深さ0.9mほど窪むSX119A同様の落ち込みであり、東と西へ延びる。これらのために講堂に関わる遺構は攪乱を受けたものと思われ、全く確認できなかった。

Ⅲ 出土遺物

出土遺物は14205点。縄文時代9317点、平安時代4588点、中近世290点、不明10点の資料が得られた。

縄文時代の遺物はSX141土塁及び整地土に設定した地山層（Ⅲ層：縄文時代遺物包含層）上面までの深掘りトレンチや土塁南方トレンチ表土下地山層（Ⅲ層）上面、あるいは築成土や整地土中からも出土した。

縄文土器は5785点、内訳は早期（撫糸文系、沈線文系、条椀文系）72点、前期（諸磯式）8点、中期（五領ヶ台式、勝坂式、加曾利E式）5691点、後期（称名寺式、加曾利B式）14点で、連弧文土器や曾利系土器を含む加曾利E式の後半段階を主とする。石器は413点、内訳は打製石斧201点、磨製石斧2点、調整剥片石器118点、礫器9点、敲石2点、磨石36点、スタンプ型石器21点、石皿21点、石匙1点、不明球状石2点で、中期の石器を主とし、早期の石器が加わる。他に土偶2点があり、その他は礫で3117点あり、この中には平安時代、中世のものも含まれると考えられる。講堂地区トレンチからは瓦片若干のみで、大半が北方地区出土である。

次に、平安時代及び中世遺物について遺構出土のものを中心として概述する。なお、中近世陶器については山下守昭氏よりご教示を得た。

1 土器類

遺構（SX141土塁や土塁崩壊土、整地土を含む）出土土器類1555点の内訳は、土師器環30点、同埴9点、同甕771点、還元焰焼成須恵器環298点、同蓋19点、同甕他117点、酸化焰焼成須恵器環他184点、土師質土器環30点、灰釉陶器碗他81点、中近世陶器16点で平安時代住居出土のものが多く、大半は小破片で、図示出来たのは、23個体である。

土師器（第10図）

1・2共SI522住居上層出土で、1はコ字状頸部の武蔵型甕で、口径20cm、器高復原28.5cm、2は台付き甕の脚部である。3は表土出土の環である。

須恵器（第10、11図）

第10図4～9はSI522住居、同10、第11図1はSI525住居、第10図11はSI526住居、同12は表土、同13はAN143区の土塁崩壊土、同14は土塁南方トレンチ南端（第Ⅲ象限のAH138区）の表土下再堆積層出土である。第10図4～7、10～12は環、8、9は皿、第11図1は甕で、第10図9、12が還元焰焼成の他は還元焰焼成（第10図5は半還元焰焼成）である。第10図6、7の底部外面に黒書文字（記号）がみられる。

灰釉陶器（第10、11図）

SI522住居上層からは第10図16の皿、同17、18の碗が出土。SI526住居からは第11図2の瓶が出土。

中世土師質土器（第11図）

図示した3点はSX141土塁西辺内側のAN141区の整地土の上の堆積層から近接して出土した。この付近にも人骨細片が分布する。3は口径復元7.1cm、器高2.3cm、底径4.4cmの小型の環。厚い底部から外面直線的な体部が立ち上がる。口縁外面は体部と弱い稜線をもって垂直に立つ。内面は底部との境が無く、ゆるやかに彎曲する。底部は平坦で、調整は明確でない。胎土に金雲母を僅かに含み、色調は赤みの薄い橙褐色。4、5は大型の環の底部片で、底径は4が6.7cm、5が6.4cm。0.8～0.9cmと厚い底部からやや薄い体部へと移行する。内面底部には指頭による調整痕を明確に残す。底部は0.1～0.2cmほど高盛で、回転糸きり離しのままである。色調は赤みのある橙褐色で、4には赤色スコリア粒が僅かに含まれる。

形態、法量の相似した例として、武蔵国府M59-SZ5地下式横穴墓出土の土師質土器資料（江口桂1996「第5章 中世」『武蔵国府関連遺跡調査報告17』府中市教育委員会、府中市遺跡調査会）の中の、3については105～

108, 4, 5 については109などがあげられる。同墓出土遺物の中に14世紀中葉の瀬戸無高台鉢を含むことや、底部外面に「版状瓦痕」がみられるなどの特徴から、鎌倉出土の土師質土器編年をもとに14世紀中葉～15世紀前半代の年代が与えられている。この「版状瓦痕」は本遺跡のものには無いが、SZ5においても109など無いものもあり、必ずしも全てに残るのでは無いようである。

中近世陶器

全て小片で、図示出来る資料は無い。土塁内整地土もしくは堆積土から、瀬戸灰釉瓶子(14世紀)、瀬戸灰釉瓶子高文印刷(15世紀)、表土から龍泉窯系青磁碗(13～14世紀)、常滑壺・瀬戸灰釉瓶子(14世紀)、常滑こね鉢(15世紀)などと共に、肥前染付草花文磁器碗(18世紀)、瀬戸美濃型摺摺り印刷染付花唐草文磁器段重(19世紀後半)、瓦質行火(19世紀)、瓦質コンロ(19世紀)、在地の素焼き植木鉢(19世紀)、在地系瓦質植木鉢(19～20世紀)、在地系瓦質火消し壺蓋・身(19世紀)、瀬戸陶器湯たんば(20世紀中)など近代に入るものも出土している。一覧して、16, 17世紀代のものが無く、「祥応寺」が18世紀初頭には「大破」して、無禮であった状況と合致する。

2 瓦埴類

遺構出土瓦埴類461点の内訳は、鏡瓦1点、字瓦2点、男瓦234点、女瓦207点、埴1点、その他不明小片16点となる。遺構別にみると、SX141土塁内整地土もしくは堆積土148点が最も多く、次いでS1522住居が94点、SX141土塁築成土77点、同崩壊土33点などで大半を占める。今回は、鏡・字の文様瓦と文字瓦のみを図示した。

鏡瓦(第11図6)

六葉素弁蓮華文で、瓦当部の厚み1.2cmと薄い。

字瓦(第11図)

7は講堂地区SX142不明落ち込み出土で、「父」の一字を配する国分寺I期(創建期)の偏行唐草文。段頸で、白色針状物質を多く含み、表面は黒灰色である。8はAM138区整地土出土で、国分寺I期(創建期)の偏行唐草文段頸で、白色針状物質を多く含み、表面は黒色である。9は表土出土で、偏行唐草文。10は表土出土で、国分寺II期(塔再建期)の偏行唐草文。

戲画瓦(図版6)

KD02は、女瓦もしくは字瓦の凸面で、叩き目をなでて消した後に細いへうで草花を描く。白色針状物質を多く含む。

文字瓦(図版6, 7)

人名、郡名、郷名、その他(記号、内容不明など)の文字瓦については遺構外出土のものを含めて101点で、銘記方法別にみると、押印・押型40点、へう書き26点、模骨6点、朱墨書29点などである。この中から内容の明確なものを紹介する。KD39講堂地区SX142不明落ち込み出土の他は全て北方地区出土で、KD09がS1522住居、KC01、KD06、40が整地土もしくは堆積土、KD45が土塁築成土崩壊土、その他が表土もしくは排土出土である。

人名文字瓦は、女瓦凹面にへう書きの名のみで「吉嶋」(KD01)、男瓦凹面に「戸主三寸□□□□」(KC03)がある。

郡名文字瓦は、都築郡押型「都」(女瓦凸面、KD19)、荏原郡押型(女瓦凸面、KD09, 27)、豊島郡押印「豊」(女瓦凹面KD06, 07)、埼玉郡へう書き「前」(女瓦凸面、KD39)、榛沢郡押印「榛」(女瓦凸面、KD03)、那珂郡押印「那」(男瓦端面、KC05)、同「中」(男瓦端面、KC01)などがある。

郷名文字瓦は、荏原郡蒲田郷かと思われる女瓦凹面(KD51)などがある。

その他の文字瓦として、不明押印(女瓦凸面、KD19)、模骨逆字「上」(女瓦凹面、KD59)、へう書きによる不明文字(女瓦凹面、KD40, 45, 47)や、記号(男瓦凸面、KC07)などがある。

3 板碑・銭貨

板碑 (第12~14図)

台石を含めほぼ完形のもの3点と種子などが何える6点の合わせて9点を図示した。石材は全て緑泥片岩。

第12図1は、SX141土塁西辺内側整地土上面のAN141区にて表を上、頂部をほぼ南に向け、基部をやや下げて出土した。基部を欠く。高さ84cmで、頂部幅22cm、最大幅(基部寄り)24.1cm、厚さ2.9cm、重さ9400g。表面は風化してやや線刻が不鮮明である。彫りは深いところで0.3cm。主尊は阿弥陀一尊種子で、半肉形状の迦座が刻まれる。銘文は中央連座の下に1行で、「正^中二年^二月日」(1325)とある。枠線は無い。第12図2は、土塁内AJ140区の整地土上面より、表を上、頂部を南西に向け、基部をやや下げて出土した。基部を欠く。高さ80.2cm、頂部幅21cm、最大幅(基部寄り)23.2cm、厚さ2.4cm、重さ9000g。彫りは深いところで0.4cm。主尊は阿弥陀一尊種子で、迦座の一部は線刻。銘文は中央連座の下に1行で、「^广(^磨)^广(^庇)二年十月日」(1339)とある。枠線は無い。第13図1はAN141区の表土出土で、阿弥陀一尊種子に半肉形状の迦座を有する。下半を欠く。第13図2はAC138区整地土上面出土で、阿弥陀種子の下半以下を欠く。第13図3は第12図1に重なって出土したもので、種子の一部が僅かに残るのみの残欠である。第13図4はAJ・AK140区整地土(上部)出土で、残存高さ24.3cm、頂部幅16cm、最大幅(基部寄り)17cm、厚さ2.2cmで、主尊は阿弥陀一尊種子で月輪を伴う。彫りは0.2cmと浅い。第13図5はAI138区表土出土で、迦座の一部のみの残欠。第13図6はAK140区整地土(上部)出土で、阿弥陀一尊種子の一部のみの残欠。

以上の板碑の出土する範囲は、土塁内南西部一帯に集中しており、出土層位からみて、後世にまとめて存置したのではなく、造立の原位置を大きく移動していないものと考えられる。ただし、出土層位が整地土中もしくは整地土上面と確認されたものでも、造立の痕跡を確認することは出来なかった。整地土及び堆積土の上部の表土層があまり形成されず、攪乱を受けやすい状態が継続された結果と考えられる。

第14図1はSK1556土坑出土の台石で、4片に割れているがほぼ完形である。幅106.5cm、奥行30.8cm、割穴幅29.4cm、割穴奥行3cm、厚さ2.7cm、重さ17200gを計る。表面は平滑に仕上げられ、割穴位置決定のための割付け線を残す。裏面もほぼ平坦で、工具の痕跡を残さない。

銭貨 (第14図)

2は旧トレンチの埋土出土の永楽通寶(明、初鑄年1408、銭径24.5mm)、3はAN137区整地土上面出土の皇宋通寶(北宋、初鑄年1038、銭径25mm、真書)、4はAN136区表土出土の元祐通寶(北宋、初鑄年1086、銭径25mm、行書)。

IV まとめ

今年度調査の結果は次のように要約される。①~④(北方地区について)、⑤(溝堂地区について)

① 下層より縄文時代中期後半を主体に、早期、後期などが含まれる遺構、遺物が検出された。竪穴住居1軒と埋壘2個所で、埋壘のひとつは昭和44年に調査された敷石住居に伴うものの残欠と思われる。本地区の北側に位置する都宮川越道住宅調査区(平成2~6年度調査、都宮川越道遺跡調査会1991~1995『武蔵台東遺跡発掘調査概報1~5』)では、早期と中期を主体として、竪穴住居76軒(内敷石住居6)、埋壘30個所、柱列4個所、配石3個所、築石18個所、土坑157基などが検出されている。今回確認された一群はこれらの広がりとしてとらえられるが、もとよりトレンチのしかも包含層上部のみに限定された発掘であるので、全体を把握することは出来ない。北側地区で多く確認された早期の遺構・遺物が少ない理由ともなっている。

② SX141土塁、同築成土崩壊土、SD312溝、SB156礎石建物(整地土)、SX143昇降口の下層から平安時代住居

が6軒確認(SI522~527)された。出土土器の様相から、SI522住居とSI525住居が園分寺Ⅱ期(塔の再建を中心とする整備・拡充期、9世紀代)、SI526住居が園分寺Ⅲ期(衰退期、10・11世紀代)と考えられる。本地区の北側に位置する都宮川越道住宅調査区の調査では(第3図)、西側斜面地を中心に、園分寺Ⅰ期(創建期)の工房と考えられる竪穴住居群や西側谷底低地から台地上にかけて園分寺Ⅱ・Ⅲ期に及ぶ遺構群が確認されており、その総数は竪穴住居が81軒、掘立柱建物が43棟、溝38条などで、本地区検出の6軒の住居は台地上に展開された一群と性格を同じくするものと思われる。従い、土塁や整地土の下層全体には北側川越道地区同様の遺構群が埋蔵されているものと考えられる。但し、その広がりや台地の先端までは及ばないことが今回設定した南方トレンチで1軒の住居も確認されないことから推察される。

③ 東京府報告を手がかりにボーリング・地中レーダー探査並びに面的発掘により、礎石と思われる石をSX141土塁に囲まれた平坦地で15個(S・1~15)確認したが、一部に対角的配置を示すものの、掘付けや抜き取りの痕跡は確認出来ず、原位置を保っている石を特定することも困難で、柱位置を復元することは出来なかった。しかしながら、一部にせよ規則的な配置がみられることや、整地土の状況、排水溝として機能したと推測されるSD313、314南北溝の在り方、土塁内直近の西辺から南辺にかかる範囲の排水機能を果たしたと推測される窪みと付近における板碑等の出土状況などから総合すると、南北18m、東西9m程度の規模の礎石建物(SB156とする)が想定される。また、奈良、平安時代の瓦が多く出土するが、礎石建物に伴うものでなく、造営段階に整地土に埋と共に入れ込んだものであることが判明した。そして、この建物に伴う瓦は確認出来ないことから、瓦葺きでないものと考えられる。

④ 三方土塁SX141は、東端が旧鎌倉街道切り通し上端より始まり、外周溝SD312の中心を基準として東西約90m、南北50mを有する「□」形の区画施設である。築成土下部層が土塁内整地土と似ていることから、一連の工程で造成されたものと考えられる。基底部の幅は3.2~3.3mで、周囲を削平して残した地山層の上に削平地山土をもつて築成(現存3層)する。築成土は中央部がやや堅固に積んでいるが、建物基礎の版築ほどではない。残存高さは地山面基準で0.5~0.6m、溝底面からだと0.9~1.15mを測るが、周囲に堆積する築成土崩壊土の量からみて当初の築成土は少なくとも現存の2倍程度はあったものと推測出来る。

⑤ 現在も切り通しに窪みとして残り、東京府報告においても、「堂へ東面シテ住時ノ鎌倉街道ニ面シ、道路ニ降ルロハ今モ尚ハ階段の傾斜ヲ成セリ。」とされた部分は、同時期に作出された昇降口SX143の痕跡であるものと推測される。この位置は切り通し入り口から約90mで、この部分での切り通し現地面からの比高差は約4.7m、法面の傾斜は約40度を測る。切り通しの上面幅は13~14m、現地面幅は2.5mほどである。なお、この切り通しはさらに160mほど続き平坦になる。切り通し入り口での比高差は約10mで、坂(現道路面)の勾配は、6~9%ほどである。

以上により本跡は、旧鎌倉街道の切り通しに東面して土塁・溝で区画された一室形式の寺院跡と考えられる。

⑥ 土塁築成土及び同層壊土や土塁内整地土もしくは堆積土からは、土師器環・甕、須恵器環、灰輪陶器碗破片など平安時代の遺物が含まれているが、これらは下層遺構のものが削平により混入したものと考えられ、土塁や建物の時期を示す遺物としては、整地土もしくは堆積土から出土した14、15世紀代の中世陶器と14世紀中葉から15世紀前半代の年代が考えられる中世土質土器、1325(正中2)年と1339(暦応2)年の紀年銘を有する板碑があげられる。昭和44年の調査では土塁中より中世のものとされる鉄製風鐸が出土(滝口宏・宇野信四郎1974『武蔵国分尼寺』)しており、この地から出土したと伝わる最古の板碑が1303(乾元2)年、最新が1493(明応2)年であることなどを総合すると、寺院跡の主体となる時期は、14~15世紀代と考えられる。

⑦ 板碑はもっぱら土塁内西辺から南辺にかけての建物想定範囲をはずれた付近に集中し、以前における出土傾向とも一致している。この付近には、人骨(碎片、未鑑定)が数箇所まとまって散布しており、埋葬供養の場としても使用していたものと思われる。

本跡出土の板碑は、個人墓2点、四分寺蔵14点(不確実4点を含む)、教育委員会蔵1点の合わせて17点で、

阿弥陀一尊種子が最も多く9点、阿弥陀三尊種子が3点、阿弥陀三尊来迎画像が1点、釈迦一尊種子が1点、六
字名号1点、不明2点となっている。阿弥陀三尊種子の内1点は1374(応安7)年銘で、天蓋の下に種子、その
下に一對の華瓶と供花が彫られており、「蓮阿」という供養者名から時宗系板碑と考えられる。同じく、主尊を
六字名号とする1413(応永20)年銘のもの(教育委員会蔵、昭和44年発掘)も時宗系板碑と考えられる。1368
(応安元)年銘の釈迦一尊種子板碑は「禪性禅尼」の法名から禅宗系板碑と考えられる。最新の1493(明応2)
年銘のものは月待供養の結衆板碑である(板碑については岡田芳朗1986「第四章 鎌倉・室町期の信仰と生活」
『国分寺市史上巻』に拠った)。紀年銘板碑でみると14世紀代が13点で主体を占めているが、同じく旧鎌倉街道に
東面する悉々窪廃寺(本跡よりおよそ750m北方に位置する)出土板碑が15世紀代のほうが多く、相互に補完す
る関係があったものとも推測される。

⑧ 本寺院跡創建の時期は切り通しの完成以後である。この切り通しに接続する道路遺構は国分寺・国府周辺で
10数地点調査され中世の鎌倉街道と理解され、尼寺中樞部西側を南北に貫通していることから、尼寺廃絶以降の
築造と考えられている(上敷領久1996『武蔵国分寺跡発掘調査概報XII』)。しかし、尼寺の衰退過程はなお詳ら
かでなく、築造年代に結論を出せる状況でない。

尼寺の廃絶時期は僧寺よりも早く、国分寺Ⅲ期前半(10世紀代)にもなり得ることは先にも指摘したところで
あるが(『武蔵国分尼寺跡1』)、廃絶後においても中樞部区画内には堅穴住居などが遺出していないこと、道路
遺構は尼寺の主要建物とは接触しないこと、路線がこの付近で尼寺中樞部方向に転換していることなどから、尼
寺主要建物が遺存し、周囲の空間も何らかの目的で継続して利用されていたものとみることも出来る。

鎌倉街道は幕府の創設後、地方の必要性和営為により順次整備され成立した(柴辻俊六1986「第一節 鎌倉幕
府の成立と武蔵」『国分寺市史上巻』)とされるが、この切り通し工事には相当の労働と経費負担が容易に想定さ
れ、尼寺中樞部を貫いていることから幕府の関与があって、国府周辺における幹線路線として、武蔵野の開発
と合わせて道路整備が行われたものと推測し得る。

従い、鎌倉時代に入る創建年代が検討される。現に府中市善明寺に安置される1253(建長5)年銘鉄仏阿弥陀
如来坐像が『新編武蔵風土記稿』の記事により本跡付近の谷より掘り出した国分寺の旧物と伝えていることから、
この像が本跡に安置されていたものとの推定から1253年とする考え(宇野信四郎1974『武蔵国分尼寺』)がある
が、出土資料にもとづけば本跡出土最古の1303(乾元2)年銘板碑から13世紀末から14世紀初頭とするのが適当
で、出土の中世陶磁器とも矛盾しない。

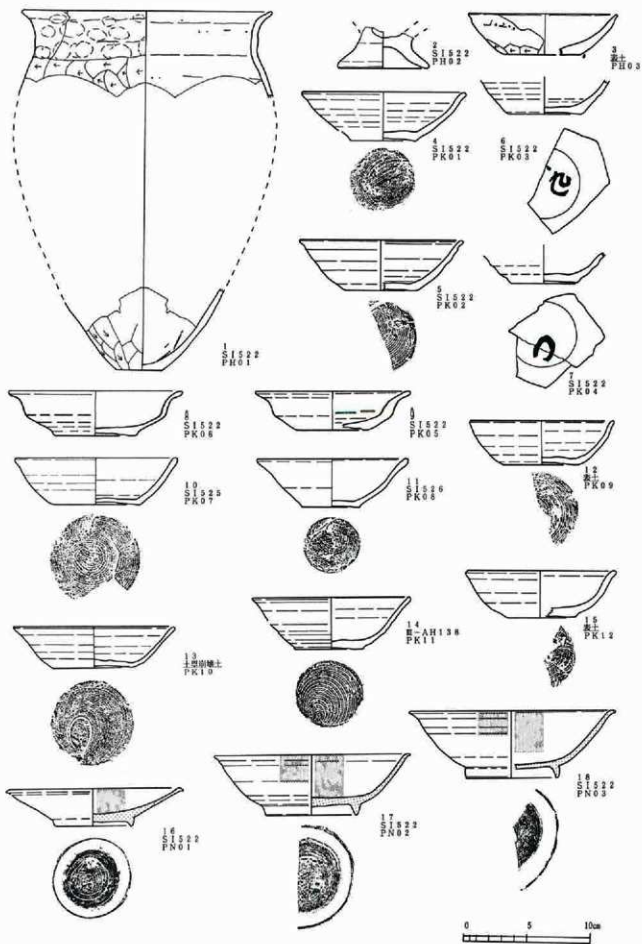
岡田芳朗は出土伝承に加えて、この坐像の尊顔が阿弥陀三尊来迎図画像板碑の主尊の容貌に似ていること、
「黒鉄」の地名が鉄仏の制作あるいは所在に由来したものと推定や、関東地方に多い鉄仏への武士層の関心な
どから、中世再興後の国分寺が業師如来に対する現世利己的信仰と鉄仏阿弥陀如来による極楽往生の信仰を中心
として、地域の有力武士や多数の寄進者に支えられて昔日の余光を保っていたとする(岡田芳朗1986)。

尼寺廃絶後の中樞部区画内にもっぱら墓域としての土地利用が及ぶのは本跡と同様14～15世紀代であり、鎌倉
街道の築造が本地域における様相の変動に大きな要因となったのであろう。

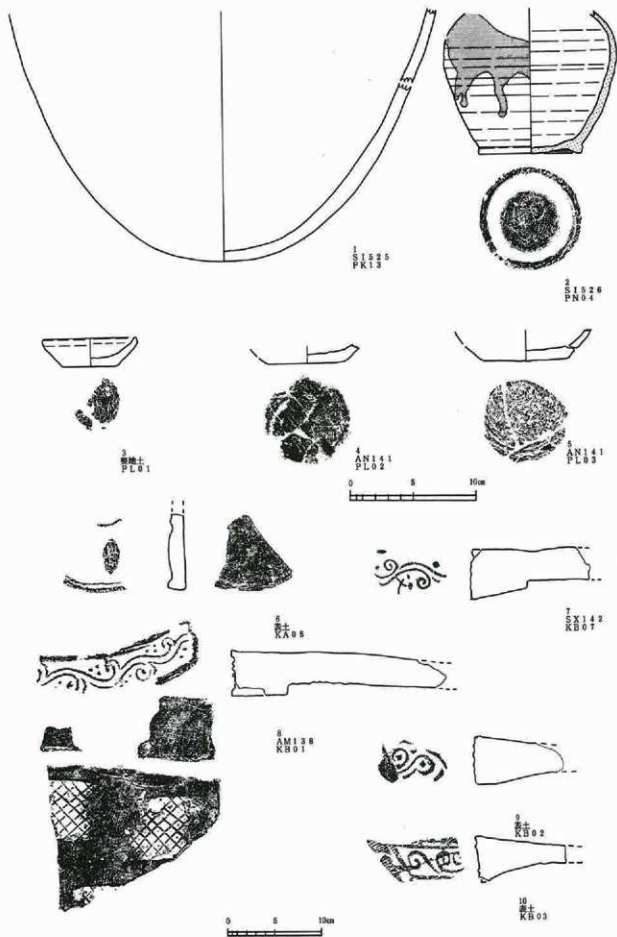
⑨ 出土遺物が無いので、SX141土壘、SD312溝、SB156礎石建物などで構成される寺院跡の16～17世紀代の実
存の確認がとれない。既に記述したように文献にある「祥応寺」が18世紀初頭には大破して無僧であったという
状況と合致するともいえるが、なおその実態は不明のままである。また、その「祥応寺」の寺名がどこまで通り
得るものかも不明のままである。

⑩ トレンチを1本入れたが、講堂に関わる遺構は確認出来なかった。

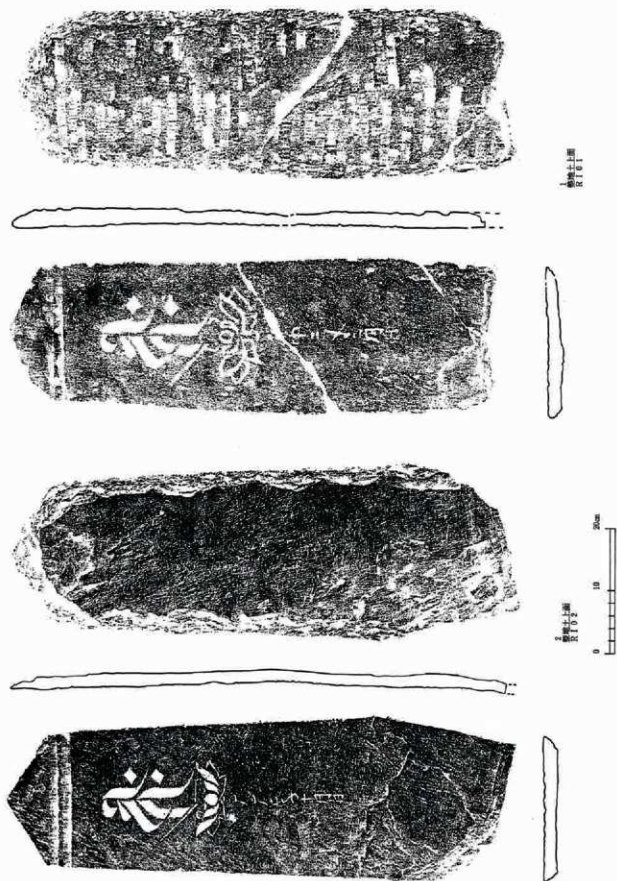
以上、本年度をもって4個年に及ぶ尼寺地区整備に伴う確認調査を無事終了することが出来た。調査開始以来
多くの皆様のご協力をいただいたことを記して結びとする。



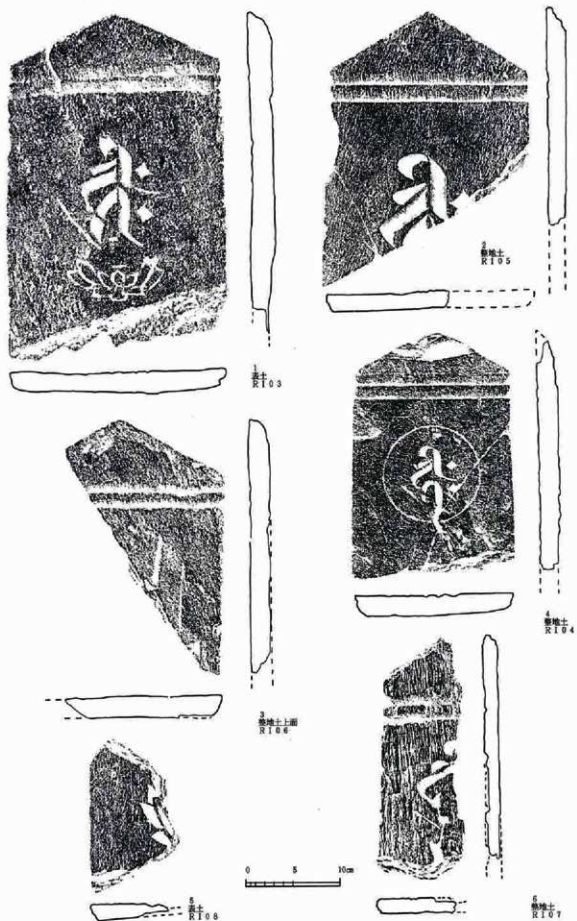
第10图 出土土器实测图(1:3)



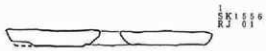
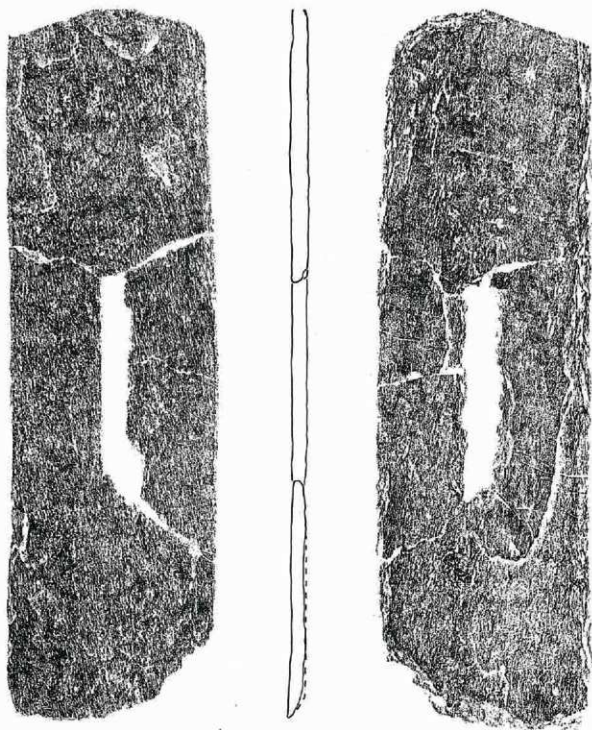
第11圖 出土土器・雜瓦・字瓦実測圖（1～5は1：3，6～10は1：4）



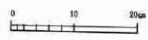
第12圖 出土板碑(1) 実測圖(1:6)



第13图 出土板碑(2) 实测图(1:4)



KG 1006
01



2
MAY

3
MAY

4
MAY

第14圖 出土板碑(3)・錢貨 實測圖(1:6, 錢貨拓は莫大)



1. SX 141 土塁内北半部全景 (西から)



2. SX 141 土塁内南半部全景 (北西から)



1. AK~AL 136 区礎石 (S-1),
S 1528 J 石囲炉 (南から)



2. AO~AQ 137, 138 区礎石 (S-
8~14) (西から)



3. S D 313 溝 (北から)



1. S X 141土塁南辺, S D 312 溝土層断面 (東から)



2. S X 141土塁西辺 (西から)



3. S I 526住居全景 (西から)



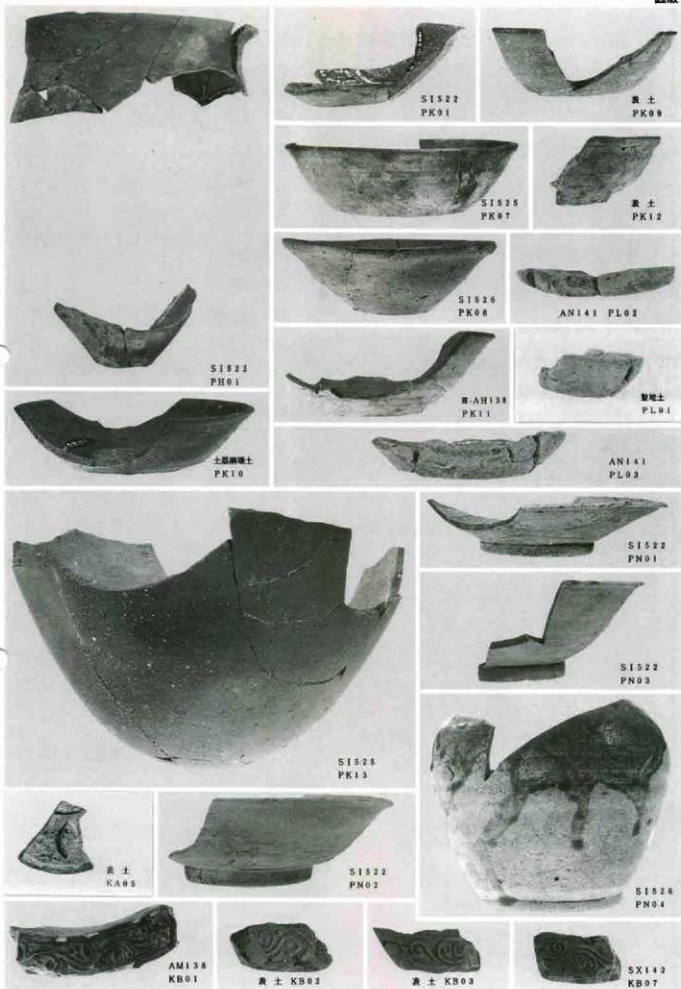
1. AN141区板碑出土状況（東から）



2. SK1556土坑板碑台石出土状況
（北東から）



3. SX141土塁南方南北トレンチ（南から）



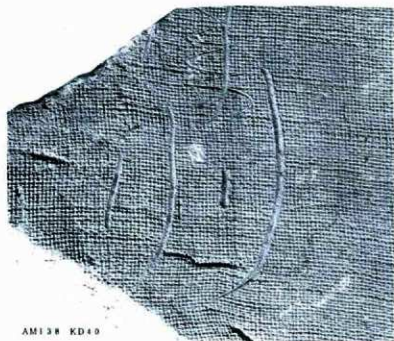
出土土器 (1 : 2, PH01とPK13は1 : 3), 甕瓦・宇瓦 (1 : 4)



表土 KD02



表土 KD01



AM138 KD40



表土 KC02



土器附屬土: KD45



表土 KD51



SI522 KD09



SX142 KD39



表土 KC07



表土 KD06



AP138 KD05



表土 KC03



表土 KD09



表土 KD03



表土 KD07



AM138 KC01



表土 KD47



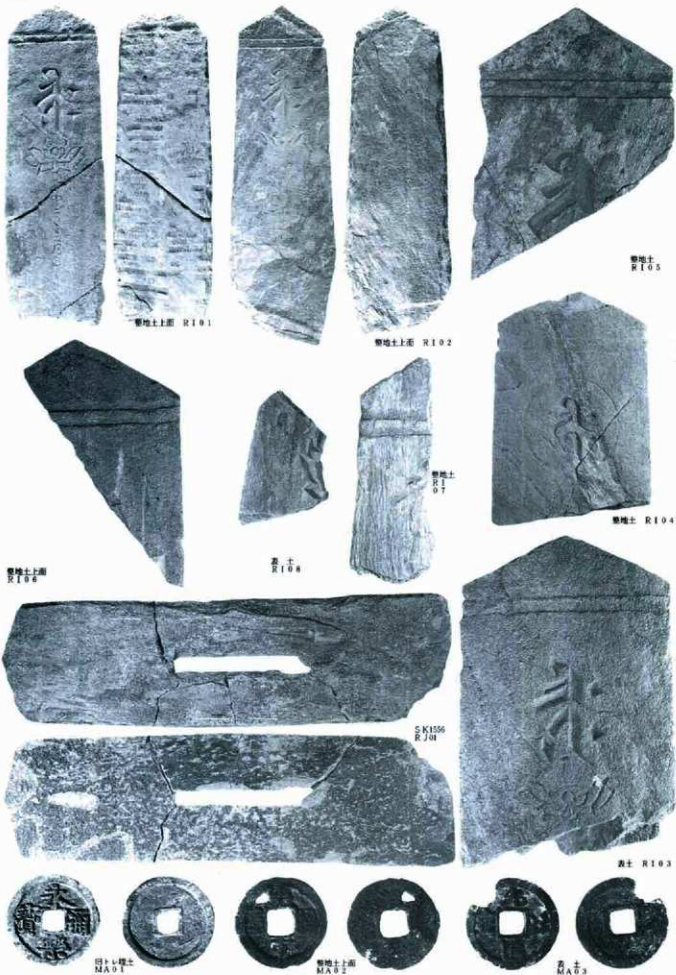
表土 KC03



表土 KD19



表土 KD27



出土板碑・銭貨 (1:4, 板碑R101, 02, 台石RJ01は1:9, 銭貨は実大)

国分寺市文化財調査報告 第44集

む かしこくふん に じ あと
武蔵国分尼寺跡Ⅳ

平成7年度発掘調査概報

発行日 平成9年3月31日

編著者 国分寺市遺跡調査団

◎(団長 吉田 格)

発行所 東京都国分寺市教育委員会

〒185 国分寺市戸倉1-6-1

TEL 0423-25-0111

印刷所 望洋印刷株式会社

